

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

https://zuioji.jp

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三十二】

後堂 門原 信典

第十九則「俱胝一指頭」 寐語
⑬「莫妄想」

【評唱】「其夜山神告曰、不須離此、来日有肉身菩薩来、為和尚說法、不須去」

「其の夜、山神告げて曰く、此を離るることを須いざれ」

俱胝和尚は、いよいよ明日は行脚の旅に出ようと、眠りに就きます。すると「山神」が夢枕に立ち「俱胝和尚よ、ここを離れる事は無いぞ」と告げました。この「夢」は何を表現されているのでしょうか？二つの事を学んでみたいと思います。

一つ目、私達は朝の勤行で、お寺の境内や建物を護つて下さる「土地護伽藍神」に無事修行を勤めさせていただく事を願ひ、感謝するお経を読みます。この「山神」は「土地護伽藍神」

です。周囲の草木大地が俱胝和尚の日々のお勤めに感応し「ここを離れるな」と語りかけてきました。

實際尼が俱胝和尚の庵を訪ねた時に「この和尚は間違いない」と確信します。「山神」に喜ばれ、護られているような清浄な佇まいが、同じ馬祖門下の大梅法常禪師の深山幽谷の辦道に重なりました。

そこには花を愛惜し、草を棄嫌する有為(作為)は無く、自然に包まれて、自然に感謝し、自然の声を聞きながら佛道修行に励む無為の姿がありました。

環境問題は今に始まったことではありませんが、いつでもどこでも衣食住を佛道修行としてどう調べて行くか？私の生涯の公案です。私の自坊は中国地方

の山の中にあり、先々代の方丈様は、牛を飼い、田畑を耕しながら文字通り「農僧」と云う暮らしの中でお寺と佛法を護持してきました。一本の草も牛の餌になり、肥料にもなります。「この秋は雨が嵐か知らねども今日の勤めの田草取るなり」「田の草をとつてそのまま肥やしか」と道歌にはあります。しかし私も経験がありますが、田んぼの草取りはかなりの重労働、靦面に足腰に応えます。多くは女性の仕事。近所の年配の女性に「女性は身体が構造が違つのですか？よく田んぼの草取りをされますねえ」と云つたら「女性だつて辛いよ、男の人より辛抱強いだけ」と一蹴されました。循環型農業の持続も並大抵な事ではありません。

永平寺七十八世貫首、宮崎奕保禪師が副貫首時代だったと思いますが、正法眼蔵の御提唱を拝聴する機会がありました。自坊で作務をする時、いつも思いだすのは「草刈りは大地のヒゲソリ(剃髪)だ」と云うお示しです。

今はスキンヘッドと云う言葉があります。私達禪僧が剃髪するのは綺麗とか汚いを離れた姿です。正法眼蔵法華転法華の巻に「ただ鬚髪を剃るなほ好事

なり、かみをそりまたかみをそる、これ真出家兒なり」のお示しのように、出家者の剃髪は私だけの剃髪ではありません。「剃除鬚髮、當願衆生、永離煩惱、究竟寂滅」と偈文にあるように「当に願わくは衆生と共に」が出家者の真の姿、それがみ佛様の願いです。

花も草も大地の生命です。花を愛でる心も、草を刈る行いも、確かに私の好き嫌い分別と云う人間の都合ですが、どちらも神佛に護られている報恩感謝の勤めとなるように願っています。そこに安心があるのですから。

そして二つ目「山神」は俱胝和尚に告げます。「来日肉身の菩薩有り来たつて和尚の為に說法せん」と。「肉身の菩薩」とは、現実はこの私を導いて下さる指導者、参学恩師の事です。この未熟な私の我見、慢心、執着を粉々に砕いて、坐禅に導いて下さる師です。生きている限り、常に励ましの警策をいただき「ただかみをそり、またかみをそる」と云う誓願を忘れずに修行できるのは、身心で導いて下さった参学の諸老師、そして多くの先輩諸師、同行の友のお陰です。

やがて「肉身の菩薩」として天龍和尚が登場しますが、実はその前に現れた實際尼が重要な役目を持っていました。實際尼が尋ねて来たことにより俱胝和尚の葛藤が導かれ、打疊行脚の決意が生まれます。實際尼も間違いなく「肉身の菩薩」でした。

一般的に「夢」は、寝て見る夢と、将来の希望を表現しますが、正法眼蔵夢中説夢の巻に「説夢にあらざれば諸佛なし、夢中にあらざれば諸佛出世し転妙法輪なし」とお示しです。「夢」も真実であり、「夢の中」の出来事こそみ佛様の働きと説かれます。何故なら「夢」には決まりがありません。浮かぶに任せ、消えるに任ず。「夢」も因縁所生ですから自我には関わり有りません。現実のこの世界も私が作り出したものではない因縁所生、この私さえも無限の生命、空間、時間という因縁所生。「夢のお告げ」と云いますが、佛道では修行の機縁が熟して、「私にはこの道しかない」と云う「身心決定」の証として説かれているのです。實際尼によって、俱胝和尚の只管な修行が、「山神」の声と姿と成つて俱胝自身に語り掛けて来ました。そこに天龍和尚が現れ、大梅法常禪師の佛法が伝わります。

(続く)

棒で打たずに僧を打つ

洞山良价禅師に逆らい五百人の僧が修行道場を去る話

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師 医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員
高岩寺 来馬 明規

【はじめに】

私たちの日常生活では、「何事も進歩を心がけ、それを他人から評価されたい」と思いがちです。しかし、仏道修行では時として思いあがりや不適切な態度にもなり得ます。そこで今回は、「仏道修行の向上や進歩」という課題を扱います。

ご紹介するのは、最古の史伝とされる『祖堂集』(1)に記された、修行道場の大事件です。唐代の曹洞宗の祖師「洞山良价禅師」(2)が、修行僧に「修行には進歩のありなしはない」と示したところ、努力を否定された誤解、反発され、それに同調した五百人の僧が道場を出て行く騒ぎになりました。最終的には僧たちが愚かな行為に気づいて道場に帰り、涙を流して謝罪し、解決しました。

【棒で打たずに僧を打つ】

先月の話は、僧が「棒で打つたのに打っていないと、役人にやり込められた笑い話でしたが、今回は洞山禅師が棒を使わずに僧たちを打ったかのような顛末で、先月の話とは対照的です。なお、次頁に読み下し文や原文も示して正確を期しましたが、読み飛ばしても構いません。

【その1 住職洞山の答えを誤解】

洞山禅師が道場で修行僧たちに教えを説いていると、① 修行僧の代表がやって来て質問した。

修行僧代表(軌辯上座※)

「二色※が実現する時、さらなる向上はありますか？」

② 住職(洞山良价禅師)

「ない※」

③ 修行僧代表は、口では「素晴らしい回答をいただきました」と述べたものの、自分の修行態度が認められていないと受けとめて動揺し、道場に返って槌※を鳴らし、修行僧らを集めて発言※した。

【※印の註】

【上座】修行僧に与えられる位号

【二色】全ての色の意 転じて

「一切平等の境地」「全ての身心をこめた仏道修行」

【ない】洞山禅師は「向上」とは修行の実践そのもので、ありなしでは示せない。殊更に「向上」の境地を設定してはならない、という意味で、「ない」と述べたが、上座は「自分は修行しても向上しない」と誤解した

【白槌】槌を鳴らして白すこと
ここでは重大事の緊急連絡の意

【その2 修行僧が住職に 猛反発し道場閉鎖】

修行僧代表は仲間と言った。

「私たち五百人の修行僧は日々進歩向上の為に集まっているはずだ。住職は『向上進歩はない』と言うがこの教説とはもう折合がつかない。道場を出る。私はこれ以上無駄な時間を過ごすことはできない。」

これを聞いた修行僧らはみな荷物をまとめ、道場から出て行った。

④ 主事道場管理の役僧が住職に言った。

「修行僧たちは住職の言葉を受け容れようとせず、出て行きました。」

⑤ 住職は主事に言った。

「好きにさせるが良い。後で私の言葉の意味がわかるだろう。」(3)

⑥ 住職は主事に道場の門を閉鎖させ、道場の裏手で茶を焙じて言った。

「どうせ修行僧たちは戻ってくるだろう。」

【その3 帰山と謝罪】

⑦ やはり住職の予言通り、修行僧

たちは修行道場に戻ってきた。

そして涙を流しながら主事に言った。

「私たちは愚かな俗人でした。住職の言葉を誤解し、受け容れられませんでした。どうか住職の面前で謝罪させていただきます。」

(筆者註 まるで洞山禅師は棒を用いずに修行僧を打つようです)

⑧ 主事が住職の居室を訪ねたが門は閉まり、開かなかった。主事がくり返し懇願して事情を伝えると、住職は修行僧らの入堂を許可した。

⑨ 修行僧らは大声で泣きながら説法を求めた。修行僧代表は住職に礼拝し、立って言った。

⑩ 「どうか私たちを棒で打つてお叱りください(左挿絵)。まるで私たちは、はるか昔の過去世から、仏に暴力を振るい、道場の和合・融和を壊してきた者のようです。どうかご慈悲の棒打ちをお授けください。」

⑪ 住職は悲しみつつ言った。

「私は若い時から、指をさして他人

を責めたこともなく、まして棒で打つこともない。

⑫ 無分別の境地(一色・全ての色をひとつにみる・さとりを言葉で表現すると、分別自分勝手なはからい)が入り込む矛盾があるのだ。だから「二色の境地の時にさらに向上の境地はあるか?」と問われたら、私は「無い」と答えるしかない。この答えにみんなの罪があるというのだ?」

【解説】

「修行は無所得」「坐禅は意味がない」などよく言われますが、最初は「そんな馬鹿な?」と信じられないのが普通でしょう。

ところが、禅の修行では進歩や成果を求めることが分別であり、執着となつて修行の本質から離れる、と説きます。事件の冒頭で、修行僧代表は「さとりが実現したあとも、さらなる自己の成長があるか?」と質問し、洞山禅師は簡潔に「ない」と答えました。

つまり、さとりの境地を「二色」と特定することに既に錯覚があるのに、修行の継続によってさらなる向上という対価が得られ、より高い所へ辿り着けると考えるのも錯覚である、という立場を示したのです。

これをあまりにも無邪気に「師が努力を否定した」「見放された」と誤解したのが、騒動の始まりでした。さらに修行道場を封鎖、すなわち「棒を用いない打棒」「打たずに打つ指導」で内省を促しましたが、これを拒絶

ない 無!
さとりとさらなる こうじょうは あるかないか
正當一色時還有向上事也無?



こうおしょうのじょうしゃく
乞和尚杖嘖! (打ってお叱りください)

と受け取り、混乱がさらに深まりました。

結局、痛みは伴いましたが、僧たちは、「修行の成果に執着していた」「進歩向上の前・後を比べていた」つまり、分別妄想にとらわれていたことに気づき、涙の謝罪となったようです。洞山禪師もこの事件をきっかけとして、「向上」を「さとり」や成仏に満足せずに、修行を継続することと捉え、丁寧な指導をするようになった、という指摘があります。(2) (a) P. 196

現代的な修行道場でも、入門直後は基本的な生活さえ思い通りにできず、「自己否定」に苛まれます。ところが慣れると、一生懸命修行している自分を褒めて「自己肯定」に傾き、日々の進歩を成果として追求し始めます。そして遂にはさつた気になって傲慢(増上慢)になったり、修行をやめてしまったり(放逸して、禅の本質から外れていきます。

真剣であるがゆえに陥りやすい、「落とし穴」への戒めが「無所得」「無功德」などの禅の言葉に込められていることを、この話から読み取ってくだされば幸いです。

「さとり」は言葉を超えた世界ですが、私たちは言葉を通じて伝えなくてはならない矛盾を背負っています。現実には今回の話のような誤解やすれ違いがありますが、それでも真摯に言葉で説き続け、さらに実践を通して体得していくことが仏道

なのかもしれません。

「言葉」は肯定と否定の対立構造をもった世界です。ですから「対立のないさとりの世界」を言葉で表現しようと工夫しても、必ず「分別」という不純物が混じります。これが洞山禪師の示す「分不分の理」⑫が意味するところと思われます。

【読み下し文】

① 軌辯上座出て来たりて問う、
「正當に一色たる時、還た向上の事ありや無しや？」

② 先師(洞山)云く、
「無」

③ 其の僧珍重し、便ち僧堂に歸り、
白槌して云く、
「五百來人の這裏に在るは是れ向上の事の為に莫是すや？ 堂頭和尚(洞山)は「無」と道う、成持すべからず、まさに合殺処に折合し了らば休し去らんもし是れ某甲ならば、這裏に在りて虚しく一生を過ぐすを得ず」と

此に因りて大衆惣く装裹せり
④ 主事和尚に向かいて説う、
「僧衆、和尚の仏法を肯わす惣く発し去れり」

⑤ 和尚云く、
「伊を從にせよ我が事、方めて行わるを得ん」

⑥ 先師主事をして僧堂の門を鎖却せしめ、処分の後、来たつて茶を闍裏にて焼き、某に向かつて

説く、
「這箇の一隊子去れり然れども転り来たらん」

⑦ 果然是て、転り来たつて惣く啼哭せり先師僧堂の門を開かず大衆主事に向かつて説く、
「某ら、実に是れ凡夫なり謬つて和尚の意旨を會し、錯つて肯せず一切は和尚に在り某ら、和尚の面前に就いて過ちを収んと得欲す」

⑧ 主事、すなわち房丈(4)に去けり和尚門を開かず、面壁して臥し房丈の門を開かず主事逼りて和尚に請い、方始めて門を開くことを得たり主事具に前事を陳べ和尚(大衆を)僧堂に入るを許せり

⑨ 後に大衆一齊に高声に啼哭し、上來して、師に上堂せんことを請えり先師座に昇れり僧軌辯出て来たつて、礼拝し起つて云く

⑩ 「和尚の杖嚙を乞う某甲ら、広大劫より來、仏身より血を出し、和尚僧を破り、直に今日に至り、謬つて和尚の尊旨を會せりもし這箇の身心を改めざれば、再び復するを得ること難からん今日において伏して乞う、和尚の慈悲あらんことを」

⑪ 先師また悲声にして云く、
「少自り來、會て手を把つて別人に指を柱したることなし豈に況んや造次に杖嚙せんや」

⑫ それ一色に分不分の理有りゆえに闍梨の某甲に、「正當に一色

なる時、なお向上の事有りや無しや」と問いしに、某甲は「無」と道えり什摩の罪過あらん？」

『祖堂集』卷八「青林和尚」

【原文】

① 軌辯上座出来問「正當一色時還有向上事也無？」② 先師云「無。」③ 其僧珍重便歸僧堂。白槌云「五百來人在這裏、莫是不為向上事？ 堂頭和尚道無。不可成持、合殺処折合了休去。若是某甲、不得在這裏虛過一生」因此大衆惣裝裹。④ 主事向和尚説「僧衆不肯和尚佛法、惣發去。」⑤ 和尚云「從伊、我事方得行。」⑥ 先師教主事鎖却僧堂門、処分後來燒茶闍裏向某説「這箇一隊子、去也然転來。」⑦ 果然是転啼哭。先師不開僧堂門、大衆向主事説「某等實是凡夫、謬會和尚意旨錯不肯、一切在和尚。某等欲得就和尚面前收過。」⑧ 主事便去房丈、和尚閉却門面壁臥不開房丈門。主事逼請和尚方始得開門。主事具陳前事、和尚許入僧堂。⑨ 後大衆一齊高声啼哭上來、請師上堂。先師昇座、僧軌辯出來、禮拜起云「乞和尚杖嚙。某甲等廣大劫來出仏身血、破和尚僧直至今日、謬會和尚尊旨。若不改這個身心、難得再復。於今日伏乞和尚慈悲！」⑪ 先師又悲声云「自少來不曾把手指柱別人、豈況造次杖嚙？」⑫ 夫一色有分不分之理、所以闍梨問某甲「正當一色時還有向上事也無？」某甲「道無。」有什摩罪過？」

【参考文献】

(1) 『祖堂集』南唐952年編集、現存する総合的な禪宗史伝の書として最古、韓国に永く保存されていた版が近年発見された。
(a) 韓国海印寺藏 影印版 禪文化研究所刊 1994年 P. 325-327.

(b) 『訓註祖堂集』古賀英彦 花園大学国際禅学研究所 P. 271-272 H PよりD L可、
http://iriz.hanazono.ac.jp/frame/book_fih.html

(c) 『祖堂集ものがたり』柳田聖山 禅文化研究所 1984年 P. 107-130.

(2) 洞山良价禪師(807-869) 中国唐代の禪僧で曹洞宗の開祖、本稿の事件は晩年開山した筠州洞山広福寺での出来事と考えられる。

(a) 洞山「惟名宏雄 臨川書店 P. 78 196 2010年、
(3) 『法華経』方便品第二に「五千人有り即ち座より起つて仏を礼して退きぬ」世尊默然として制止したまわす。」

(4) 「房丈」は「方丈」(住職の居室の誤りとの指摘あり、衣川賢次「祖堂集」異文別字校證 東洋文化研究所紀要 157 P. 191-316 2010年、

(5) 私見ですが、本誌にも示された瑞應寺三十世大慈通元老師の、厳しくも慈悲に満ちたご指導は、本稿で解説した、洞山良价禪師そのもののよう

に思われます。
本誌令和六年八月九月号「慈悲こそ命」西田正法、



半夏生ず

西日本では、今年の梅雨明けが観測を始めてから一番早かったそうですが、皆様のお住いの地域では如何だったでしょうか。今年の夏も暑い日が長く続きそうです。

瑞應寺では七月の初めの半夏(夏の正式な九十日の修行期間の中間の日)に首座法戦式(修行僧のリーダーである首座和尚が公案一則を提起して、他の修行僧とその義を討論することを法戦や法問、法座という)を行うのが恒例となっています。

その法戦式に合わせて首座和尚さんにお祝いの意味を込めた、麻のお袈裟を裁縫させて頂いております。丁度梅雨の時期に重なるので、晴れたら草刈り、雨が降ったらお袈裟の裁縫をしようと、毎回悠長に構えていて、いつもギリギリ。今年は所用も重なり、もう本当にギリギリで、六月末は朝から深夜までお袈裟に向き合うことが出来ました。

日本の雑節の一つに半夏生(はんげしょう)があります。夏至から数えて十一日目頃を指し、今年は七月一日が半夏生となります。梅雨明けの目安、田植えの目安で、この日までに田植えを済ませていなければ秋の実りが減ると言われており、「半夏半作」といった言葉も残っています。

また、豊作を祈願し、農作業を休んで体を休める日とされ、単なる暦

の日付というだけでなく、日本の生活に根付いた日といえます。

お袈裟と田植えといえは、お袈裟が作り出された時の逸話が想起されます。それはお釈迦様のご在世当時、仏教に皈依された王舎城のビンビサーラ王が、仏道修行者との教えの修行者を見間違えて礼拝供養しようとしてしまったことから、仏道修行者との修行者を区別できる衣服を願ひ、作られることになったこと。形については、お釈迦様が農村で遊行中、田植えが済んで整然としている水田の風景をご覧になり、この美しい水田の形を模して仏道修行者の衣服を作るよう、弟子の阿難尊者に指示されたことです。

水田を模して作られたお袈裟を田相衣(でんさうえ)や福田衣ともよび、福田とは、福を生ずる田、良田であるほど収穫も多く、水田を模したお袈裟を身に着けている仏道修行者も良田にたとえられ、その徳がすぐれた良田であればあるほど、信者が施した供養が倍増し福徳となり信者に得させるとされています。

仏道修行者にとってのお袈裟の功徳とは、半夏生までに田植えをする様に、今すべきことに集中する。修行中は懸命に修行に励む、今を大切に生きることこそが功徳であると教わっております。

夏真っ盛り、皆様がお元氣にお過ごしただけのことを祈念しております。

瑞應寺専門僧堂維那 吉松聖博

令和七年七月一日〜十日

法戦式

今夏制中、

前田聖也師の法戦式が七月一日(火)に修行され、「永平頌古・拈華微笑之話」に就いて法問を戦わせた。当日は、僧堂諸役寮師、梅花講、和敬会等随喜した。



恵光忌

七月十日(木)、当山元西堂、橋本恵光老師の示寂忌正當諷經を楞嚴会朝課罷に厳修。



筆供養・弁天大祭

七月十一日(金)(旧暦六月十七日)に毎年恒例の筆供養・弁天大祭が行われた。

当日午後より山門頭広場の筆塚前にて、古筆の焼却供養が行われ、夕刻には、弁天堂にて、弁天大祭が行われた。



七月の日鑑

- 一日 祝祷・法戦式
- 六日 日曜参禅会
- 十一日 筆供養・弁天大祭
- 十三日 日曜参禅会
- 十五日 祝祷・略布薩
- 参玄会(十七日迄)
- 十七日 魚成長寿会参拝
- 十八日 観音講(仏教勉強会)
- 廿日 日曜参禅会
- 廿七日 日曜参禅会
- 卅一日 略布薩

八月の予定

- 一日 祝祷
- 三日 日曜参禅会
- 六日 住友展墓
- 七日 楞嚴会満散・土地堂念誦



鐘声

うだるような暑さの毎日、小型の扇風機を片手に道を歩く人も風物詩と成りました。

『風性常住 無処不周』という禅語があります。

中国の唐の時代、麻谷宝徹禪師に対し、門下の僧が「風はいつでもどこにも満ち満ちているのに、なぜわざわざ扇を使っているのをつくり出すのか」と尋ねました。禪師は扇を使う動作をもって答えられたということです。

地球温暖化で四季の移りも年々様子が変わっております。地球が温暖化しているのか、アスファルトやコンクリート、エアコン室外機の発熱による気温上昇か。

瑞應寺でも暑い風に満ち溢れながら、雲水たちが毎日の坐禅も汗を流しながら、坐禅辦道に精進しております。 興道

- 八日 小参・人事行礼
- 十日 日曜参禅会
- 十五日 祝祷・略布薩
- 十六日 水施食
- 十七日 日曜参禅会
- 十八日 観音講(仏教勉強会)
- 廿日 学校茶道
- 廿四日 日曜参禅会
- 廿七日 愛知学院大学参禅
- 卅一日 略布薩